百合子賞　正賞　受賞作品

その先の光へ

郡山市立郡山第七中学校
伊藤瑠美

鈍色の空の下、たとえこの空が、輝く青の空に戻るのだとしても、明日なんて来るなと何度願ったことだろう。

【嫌われるのが怖くなった】

中学校に入学して思った。

「学校生活は情報戦だ。」

と。一年生の夏、あれこれかわいいもの、流行りの物を知っている女の子たちがクラスの中心になった。私は、彼女達に勧められてＳＮＳを始めた。最初は、少し大人になった気分だった。無垢だった。私は、ある投稿に「いいね」した。それを彼女達が嫌悪しているとも知らずに。本当に、無知だった。

幸い些細なことだったため、彼女たちがＳＮＳ上で私を攻撃することはなかったが、ＳＮＳのそのアカウントはすぐに消した。世の中は、周りの都合も考えて自分の好きなものを好きと言っていいかを判断すべきなんだと思った。正しいことではないと分かっている。ただ、彼女達と毎日顔を合わせるのも辛くなっていき、次第に彼女達からも距離を取られるようになり、馬鹿馬鹿しいかもしれないが、ボロボロになった学校での人間関係を取り繕って生き抜くには、そうするしかないんだと諦めた。

いかに自分の周りの出来事を知っているか、それが全て。誰が何をしたか、何を好んで、何を嫌っているか。それさえ知っていていれば仲良くするのは容易いのだと。うまくやっていけるのだ、と。

【毎日を慎重に過ごした】

私達は進級して、新しいクラスで半年を過ごした。

「今回のテストの結果で、自分は行きたい高校のレベルに対してどのくらいの位置に居るのか、しっかり考えておいて、冬休みの勉強に生かすんだぞー。」

中学校生活の中間地点。二年生の秋。今日は、二学期最後の定期テストの答案の返却日だった。先生達は、「今から受験のことを考えておきなさい」という。

チャイムが響き、担任の茂原先生（通称茂ちゃん先生）が持ち前の大きな声で呼びかけ、教室から出ていく。手元にある紙は、私、瀬谷芽生の、特別良いわけでもない成績表。

「茂ちゃん先生、今日も髪の毛くるくるだったね。芽生、テストどうだった？」

前の席の優等生、依澄がぐるりと上半身をねじらせ、無邪気な笑みに、まっすぐで嘘のない瞳をこちらに向けて訊いてくる。

「別に、まあまあだったよ。依澄は？」

「うーん。もうちょっと頑張れたんじゃないかなって感じ。」

力の入っていない依澄の手の中からちらりと見えた成績表は、学年トップレベル。

「またまたー、今回も良いんでしょー。いいなぁ、依澄は頭良くてさ。私なんていくらやってもダメだよ。」

そんなもの見えていないフリをした。才色兼備でおまけに性格も良くて、面白くて、気取らない。本当にこういう人もいるんだなぁと思わせ

るような子だ。
　依澄は机の淵を見るように、少し目を伏せた。
「まだまだだよ。まだ、この成績じゃ安心できないの。」
「大変だね。」
「そんなことはないんだけどね。」
　困ったように笑う依澄の顔を見て、こんなにいい成績を取れて、私より良いところも沢山あるのに、何が不満なのだろうと思ってしまう。依澄と話していると、何となく居心地が悪い。決して依澄が嫌いなのではない。そのうち、彼女の周りには、彼女の成績が気になる様子のクラスメイトが三、四人集まり、私と同じような反応をしていた。私はさり気なく依澄から離れて、窓のそばの席に座る友達の元へ歩み寄った。
「芙文ちゃん。」
　重い前髪でおっとりした目つきの彼女は、今年のクラス替えで初めて接点ができて、仲良くなった戸倉芙文ちゃん。
「最近流行ってるアニメがあってさ、芙文ちゃんアニメ好きだったよね？知ってるかな、超面白いの。」
　芙文ちゃんとまで成績の話はしたくなかった。昨日、高校生の姉から勧められたアニメの話題を持ちかける。芙文ちゃんは微笑んで、
「最近始まったやつだっけ、面白いよね。」
と、話題への反応は好感触だ。
「そうそう、最初の方、主人公がヤバくてさ、夜中に爆笑しちゃった。」
「爆笑って、二人以上でメッチャ笑うときに使うんだよ、瀬谷〜？」
　今日も割り込んできた、荻野悠。クラスの男子で一番私を小馬鹿にして、からかってくる面倒なヤツだ。
「うるっさいな、もう。伝われば何でもいいじゃん。」
「瀬谷、顔真っ赤、はい怒ったー。正しい日本語使えよなー。」
「まぁまぁ、今日帰ったら観てみようかな。」
　芙文ちゃんが言ったときには、荻野は他の男子の集団に、いつのまにか紛れていた。
「ほんと、子供だよね。」
「荻野くん？」
「そうそう、いっつもああやって煽ってきてさ。」
「そうかな、仲良しで、楽しそうだなって思うよ。」
「えー、面倒臭いよ。」
　芙文ちゃんと話していると、廊下に居た部活の友達に呼ばれた。
「今行く！芙文ちゃん、またねー。」
　鞄を背負って水筒を持った。
「アニメ、観てみるね。」
　芙文ちゃんはそう言って、窓から差し込んでくる光の中で、手を振った。

【どうせ表面上だけだろうけど】
　次の日の二時間目の理科。クラスの担任であり、理科担当の茂ちゃん先生、否、茂原先生の眉間には、皺が寄っていた。定期テストの範囲のワークの提出日だった。提出したのは、クラスの約三分の一。ありえないくらい低い提出率だ。
　私は提出した。依澄と、芙文ちゃんも提出していた。荻野は、提出していない。
　クラスみんなで仲良く先生の怒りの鉄槌を喰らった。授業の終わりに、
「放課後までに全員ワークを提出すること。」と、いつもより低いトーンで残していった。
「今日短縮時程で部活なしじゃん、教科委員、ワーク集めるの面倒だね。」
　依澄がしょうがないかと笑う。
「昨日寝ちゃったんだよね。」
「あと二十ページもある、終わってるー！」
「休み時間にやんの？面倒くせー。」
「ワーク、普通に家に忘れた、どうしよう。」
　ワークを何故提出できなかったのか、さまざまな声が教室内を飛び交

う。
「お前、昨日テスト終わってから彼女と遊んでたんだろ、ＳＮＳのストーリーに写真上げてたのを見たぞ、バカだなー。」
一人の男子が他の男子をからかっている声も聞こえた。
「あれ、アイツって彼女いたっけ。」
依澄がそちらに視線を向ける。
「うん。確か一か月くらい前にＳＮＳで言ってた。隣のクラスの子だよ。」
「ほんと、芽生は情報通だね、全然知らなかった。」
誰と誰が付き合っただとか、別れただとか、そういうことを知らないと、相手の地雷を踏んでしまうかもしれない。だから私は、取りこぼしなくそういう情報を手に入れるようにしている。
「まぁね。」
依澄に唯一勝てるのは、これなんじゃないかと思う。
休み時間、荻野は珍しく誰とも絡まずに、机に向かって黙々とワークをやっていた。
「荻野、あと何ページあんの？」
「んー、ちょっと。」
集中しているのか、普段より口数が少なかった。
放課後、依澄がワークを集めるのを手伝おうと私を誘った。確かに、クラスの半分以上から集めるとなると大変だろう。芙文ちゃんもワークを集めておくように言われた理科の教科委員の一人だから、彼女と一緒に帰るためにも手伝うことにした。
「ワーク出してない人、出してー。」
芙文ちゃんが提出していない人の机を出席番号順に巡っている。
「ワーク、出せる？」
芙文ちゃんが荻野の机に巡って来た時だった。
「俺、明日出すから。」
荻野は鞄からワークを取り出す素振りも見せず、そそくさと鞄を背負い、教室を出ようとしていた。芙文ちゃんが困ったように「でも……。」と引き留めようとするが、荻野の耳には届いていないようだ。もどかしくなり、
「荻野！出してから帰れって。先生も言ってたじゃん。休み時間もやってたんだし、三十分もあれば終わるんじゃない？ちゃちゃっとやって、出して行ってよ！」
「いいから。明日出すから！」
「そうやって、あと少しなのに逃げるんだ。そんなんだと、信用なんかなくなって、いつか大切な時に皆に置いて行かれるよ！」
荻野は一瞬立ち止まり、何かを言いかけたが、口を噤んで、顔を背けた。暫しの沈黙の後、荻野は廊下を走って帰って行った。
乾いた空気が日差しを受け、荻野がいた場所には、チカチカと細かい埃が漂っていた。
「ま、明日怒られても私たちには関係ないしね。」
荻野を引き留めるのは諦めて、呟いた。
「芽生がはっきり言ってくれてよかったー。アイツ、いっつも部活ない日はああやってすぐに帰るんだよ。委員会の仕事とかもサボってさ。」
理科の教科委員の男子が言う。
「まぁまぁ。」と依澄はざわつく皆をなだめていた。
「芙文ちゃん、アイツの分は気にしないで、集まった分だけ、出しに行こう。」
荻野の席の前で固まったままの芙文ちゃんに歩み寄り、声をかける。
「…うん。」
芙文ちゃんは戸惑った顔をしていた。
「全員の分を絶対集めなきゃいけないわけじゃないよ。先生も怒るなら荻野を怒るはずだし。」
「そうだね。」
納得してくれたのか、芙文ちゃんは次の出席番号の人の元にワークを回収しに行った。

【知る由もなかった：芙文】

教科委員の仕事で、みんなより少し遅れた帰り道。クラスでいつも一人の私に話しかけてくれる芽生ちゃんは、折角早く帰れる日だったのに、私たちの仕事を手伝いながら待っていてくれた。芽生ちゃんは流行りの物をよく知っている。

時々、前好きだったものは今はどうなんだろう、と思うのだが、目をキラキラさせて新しいもののことを話す芽生ちゃんを見ていると、そんなことどうでもよく思えてくる。

「芙文ちゃん、また明日。」

芽生ちゃんとの分かれ道。いつものY字路。

「うん、またね。」

芽生ちゃんと別れた後は、家までの長い一本道。通りの木々が風に吹かれて、赤、黄、茶色になった葉を散らしている。一歩、また一歩と踏み出すたび、足元で落ち葉がカシャカシャと心地よい音を立てる。前方から、同じような落ち葉を踏む音が聞こえてきた。ふと顔を上げると、歩いてきたのは紛れもなく、今日、ワークを提出せずに帰ってしまった荻野君と、荻野君の手をしっかり握る小さな男の子だった。

「…荻野君……。」

「…お、おう。」

乾燥していたはずの手に、汗が一瞬にして滲んだ。気まずい。とても気まずい。気付かないふりをしてすれ違ってしまえばよかったが、もう遅い。お互いに足を止めてしまったから、どうしようもない。

「弟くん？」

男の子は、恥ずかしいのか、荻野君の左足に半分隠れている。片手で荻野君の手を握り、もう片方の手にどんぐりを入れたビニール袋の口をすぼめるようにして持っている。

「そう。来年、小学生になるんだ。そこの幼稚園の帰り。いつも公園に寄るんだ。」

「そうなんだ……。」

今日の放課後の感じから、何かあるんだろうな、とは思っていたが、それにしてもなぜ荻野君が、と疑問が浮かんだのが顔に出ていたのか、それを読み取ったように荻野君は、

「うち、両親が共働きでさ。いつもは両親が交互に弟の迎え行ってるんだけど、俺も二年生になって学校にも慣れてきたし、弟も来年から小学校だし、週一、部活休みの木曜日だけは俺が弟を迎えに行くって親に言ったの。どうせ早く帰っても暇だしさ。」

と、学校で友達と休み時間に何でもない話をするように平然と語った。

「そっか。」

すごいね。大変だね。何と返答したらいいのか分からなくなった。沈黙が苦しい。そんな私の思考回路を見透かすように、

「あんまり俺、家のことを人に言わないからなぁ。言うと、弟がいることにびっくりされるんだよな。あ、ワークは明日本当に出すから。またな。」

ニコニコして荻野君は弟と、私とは反対方向に歩いて行った。背中越しに、

「お兄ちゃんのともだち？」

「そ、兄ちゃんの学校の友達。」

荻野兄弟の内緒話のような、柔らかくて、温かな会話が聞こえた。鼻から吸い込む空気は冷たかったが、さっきまで声を発していた喉元は、ドクドクと脈を打っていた。

荻野君と弟くんの足音も聞こえなくなって、芽生ちゃんは、このことを知っているのだろうかとふと思った。今日の放課後の感じだと、知らないのだろう。荻野君を責めたのは芽生ちゃんの正義感で、彼女が悪い子じゃないのは十分知っている。でも、今日の荻野君の行動には意味があったことを知ってほしい。もちろん、宿題を忘れた荻野君を擁護するわけではない。しかし、芽生ちゃんには荻野君を責めないでほしい。

そんなことを考えていたら、あっという間に家の前に着いていた。

「ただいまー。」

家に入ると、お父さんが仕事に行く準備をして、出掛けるところだった。
「おかえり。テストの結果見たぞ。前回より良くなったんじゃないか？」
「頑張ったよ。それより、お父さんはこれから仕事？」
「うん。遅くまでかかると思う。母さんは夜までには帰ってくると思うから。」
「分かった。行ってらっしゃい。」
「冷蔵庫に麻婆豆腐があるから、腹減ったら温めて食べな。」
「はーい。」
ガチャンと玄関のドアの閉まる音がして、私は独りになった。家の外ではお父さんの車のエンジンがかかっている。上着を脱ぎ捨て、階段を駆け上がって、二階の自分の部屋に入り、スマホを手に取りトークアプリを起動させ、芽生ちゃんとのトーク画面に文字を打ち込もうとした。急かすように荒くなった息。しかし、画面に軽く触れた人差し指はそのまま動かなかった。どう伝えればいいのだろう。荻野君のことを伝えようとしたが、言葉が浮かばない。しかし、そもそも荻野君の事情を私が勝手に他言していいのだろうか。荻野君も、「あまり家のことは話さない」と言っていた。芽生ちゃんも、悪気があって荻野君を責めたわけではないのに、気にしてしまうかもしれない。
結局、トーク画面に文字を打ち込むことはできず、アプリを閉じた。
それでも芽生ちゃんには知っていてほしいと思ってしまうのは、私の自己満足だ。
スマホを勉強机の上に伏せて、ベッドに倒れ込んだ。何だかどっと疲れた。

【疑ってもみなかった：芽生】
「芽生ちゃん、たっだいまー。」
リビングでお菓子を食べて、漫画を読んで、週に一回の長い放課後を満喫していたら、今日もごきげんなお姉ちゃんが帰って来た。
「おかえりー。あのさ、芙文ちゃんが教科委員の仕事でワーク集めてたんだけど、クラスの男子が、休み時間ちゃんとワークやってて、あと少しやればすぐに出せたはずなのにね、明日出すって言って出さなかったの。先生に放課後全員提出するように言われてたのにさ。何ていうか、無責任だよね。こっちは先生とみんなの板挟みだっていうのにさ。」
「あーいるいる。そういうヤツ。」
手を洗いながらお姉ちゃんが言う。
「だからもうそこでハッキリ言ってやったの。逃げないで出せって。結局、そのまま帰っちゃったんだけどね。」
お姉ちゃんがソファーに腰掛け、不思議そうに言う。
「何だろうね。そんなに急いで帰ったなら、何かわけがありそうじゃない？」
「そうかなぁ。絶対早く帰りたかっただけだと思うけど。」
「はは、まぁ大体はそうだよね。」
お姉ちゃんは、立ち上がってキッチンに行き、アイスを持ってリビングを出ていった。もう肌寒くなってきているというのに、よくアイスなんて食べるなぁと思う。
しばらくして、雨が降って来た。外はすっかり暗くなっていたから、カーテンを閉めて宿題をやることにした。読んだはずの漫画の内容は、イマイチ頭に入ってこなかった。

【今日も何も変わらないと嘆いていた】
次の日の朝も、雨は未だ止んでいなかった。二、三日は続くと、テレビの天気予報が言っていた。
「おはよー。」
Y字路で芙文ちゃんと合流する。
「芽生ちゃん、おはよう。」
「昨日さ、スマホでいろいろ見てたらまた面白いの見つけてさー……。」
まつ毛を伏せた芙文ちゃんは、いつもの芙文ちゃんとは様子が違った。

ドキリとした。もしかして話題にしたのは、芙文ちゃんの嫌なものだったのかもしれない。落ち着いて、
「どうしたの？雨降ってるし、具合悪い？」
と聞くと、芙文ちゃんはいつもの芙文ちゃんのように、
「ううん。何でもないよ。」
と言った。嘘だ。鈍感な私にでもわかる。傘の中で、よく見えなかったが、何か思い詰めている顔だった。
「何かあったら、言ってね。」
根掘り葉掘り聞くと、ウザがられるかもしれない。本人が言うまでは触れないでおこうと思い、一旦考えるのをやめた。
教室に入ると、鞄が濡れてしまった子、髪の毛がびしゃびしゃの子、制服が濡れてしまって、体操着に着替えている子もいた。
窓の外が暗く、心なしかいつもより教室が狭く感じる。私の鞄も、傘で庇いきれなかった部分が濡れていた。鞄を拭いて教科書を取り出し、ロッカーにしまいに行く時、担任の茂ちゃん先生のよく通る明るい声が響き、
「おはよう！」
「おはようございまーす。」
とやる気のない、どんよりしたみんなの声が続いた。席に戻ると、
「おはよう芽生。ねえ、今日の茂ちゃん先生、湿気が多くていつにも増して髪の毛くるくるだね。」
依澄がふにゃふにゃと笑っている。こんな気分が下がる朝でもいつも通り明るくいられるのは、うちのクラスでは、茂ちゃん先生と、依澄と…あと、荻野くらいだろうと思う。
「席についてー。ホームルーム始めるよー。」
日直が教室のざわめきと雨の音に掻き消されそうになりながら声を張る。
順番通りに淡々と進むホームルーム。これと言って面白いこともないので、朝、何だか具合の悪そうだった芙文ちゃんの方を何ともなしに視線を向けていた。
三時間目、今日も理科の授業があった。茂原先生はワークのことに触れた。
「昨日の放課後、大体の人は提出したようだけれど、出してない人達は、どうするつもりなんだろうね。評定にも関わってくるし、先生はみんなが後悔しないように言ってるんだから、優しく言っているうちに何故提出していないのか、いつまでに出すのかを言いに来なさい。」
昨日の怒りの鉄槌はなくても良かったんじゃないかと思うくらい、先生の語りは穏やかだった。もっとも、未提出の人達が言いに行かずにバックレるのだとしたら、それこそ今の穏やかさは、嵐の前の静けさということになり得るのだが。
授業が終わってすぐ、依澄と話していると、荻野は職員室に行った。つい、
「怒られるのかね、荻野は。」
と呟く。
「茂ちゃん、今日は授業のとき別に怒ってなかったし、大丈夫なんじゃない？」
頬杖を突きながら、依澄は感心などなさそうに言った。

【私にできることは：依澄】

私と荻野悠は幼馴染である。といっても、よくある漫画のように特別仲が良いわけでもない。荻野の両親は共働きで帰りが遅く、私の両親は海外赴任していて、私は祖父母と暮らしている。親同士が知り合いでお互いの事情は知っているが、それだけのことで、あとは他のクラスメイトと変わらない。
四時間目は体育で、バレーボールだ。体育館をネットで区切り、二クラスの男女が分かれて半分ずつ使う。
チーム分けをし、試合が始まった。私のチームは次の試合からだから、何かしようと思い、体育館を区切るネット際の得点板の傍に立った。偶

然、荻野もネット越しの男子の得点板の傍に立っていた。
「昨日、言えばよかったのに。」
　思っていたことがおもむろに口に出た。
「何を？」
「弟くんのこと。恥ずかしいことじゃないんだし。」
　立ち込める熱気と汗と雨の匂い。電子ホイッスルの音。淡々と得点札を捲りながら、背中合わせの会話は続く。
「別に言ったって、結局はワークをやってなかった俺が悪いんだし。」
「そうだけどさ。」
　得点が入る。さっきからボールは、サーブから十秒も経たないうちに床に落ちている。
「そういや、あのあと戸倉に会ったんだ。」
「芙文ちゃんに？」
「そう。そのとき、戸倉には話したよ。」
「へぇ。」適当に返事をしてまた得点札を捲る。後ろの席の芽生と話しているときの感じが今朝からいつもと違うなとは密かに思っていたが、そのせいか。
「そういや、依澄の親、冬休みに帰ってくるんだろ。」
「そーね。帰ってきたら、お祭り騒ぎかも。」
　時間切れのタイマーのけたたましい音で思わず耳を塞ぎたくなる。「次の試合の準備しろー。」と先生がタイマーを止めながら言う。得点板の得点を0対0に直し、コートに入った。
　手を洗ってから教室に戻り、給食の準備が終わるまで読みかけの本を読もうと思い、机の中を探っていると、ちょうど芙文ちゃんが前を通った。相変わらず浮かない顔をしている。本を取り出そうとするのをやめ、もう席に着いている芙文ちゃんの方へ行く。
「荻野のこと、そんなに気にしなくてもいいんだよ。」
　彼女は俯いていた顔をパッとこちらに向け、
「どうして、依澄ちゃんが？」
とこぼす。
　説明しようとした時、給食当番が配膳を始めたため、「とりあえずこの話は昼休みにしよう。」と言った。
　昼休みになり、今度は芙文ちゃんからこちらに来た。後ろに芽生もいたので、ちょうどいいと思い、声をかけ、二人に荻野の事を話し始めた。

【己の醜さを知った】

「…ってわけ。」「それでね……。」
　依澄が荻野の事情を、続いて芙文ちゃんが昨日の帰り道にあったことを話してくれた。頭が真っ白になった。俯いた視線の先にあるノートに書かれた自分の名前が憎い。
「ごめんね、私、ひどい奴だ。」
　こんなんだから、私はいけないんだ。
「そんなことない。芽生ちゃんが悪いんじゃ……。」
　芙文ちゃんの言葉が次第に聞こえなくなっていった。

　学校生活は情報戦だなんて。
　なんという傲慢。
　何を知ったフリをしていたのだろう。
　何故あの時立ち止まった彼の姿に、何も想像することができなかったのだろう。
　目に見えたことしか考えられなかった。
　言ってやったなんて悦に浸って。

　隣で黙っていた依澄が口を開いた。
「芽生、一回冷静になったら？」
　依澄の声に呼び戻され、芙文ちゃんまで俯いて唇を噛み締めていることにやっと気が付いた。
　止めどなく押し寄せる後悔と罪悪感の波。

「どうしよう。どうしたら良いんだろう。」

依澄も芙文ちゃんも、黙っていた。ただ、私の中の私が「もっとちゃんと私を見て。」と言っていた。

【日常の美しさに気付いた】

三学期の修了式も目前になった。一か月後には三年生。今考えると、本当にちっぽけなことで、深刻に考えていたんだなと思う。日常のうちの、私の中のほんのひとつまみの経験だった。だが、当時の私にとっては、それはそれは大きな失敗であった。あの後、「荻野に謝る?」「それは不自然じゃないか?」などと自問自答したが、荻野は弟のことを広く知られて、同情されたり、褒められたり、特別扱いされたくなかったんじゃないかという結論に至った。だから、特別態度を変えることはせず、ふざけて絡んでくるいつもの荻野に、敬意と親しみを込めて、ふざけ返すことにした。

みんなの情報を取りこぼしなくSNSで集めようとするのも、やめた。入ってくる情報ばかり気にして、誰かを先入観で決めつけてしまうことの罪深さに気付いたから。

「春休みの宿題は各教科のプリントのみだが、プラスアルファの勉強で個人差が出るんだからなー!」

茂ちゃん先生が持ち前の大きな声で呼びかける。

「ね、芽生、来年も、担任は茂ちゃん先生だといいね。」

依澄がぐるりと上半身をねじらせ、無邪気な笑みと、嘘のないまっすぐな瞳をこちらに向けて訊いてくる。

「そうだね、クラス替えもないし、大丈夫じゃない?」

「わからんぞぉ~。」

何故か依澄はニヤニヤしている。

「何でそこで笑ってんだよ、矛盾してんじゃねーか。」

荻野がひょっこりやってきて、依澄にツッコミを入れる。

「来年も茂原先生がいいなぁ。周りがうるさくても、先生の声は絶対ハッキリ聞こえるし。指示を聞き逃すことがないからね。」

と、芙文ちゃん。

来年も、こうやってみんなと居られるといいなぁ。

「芽生ちゃん、心の声漏れてるよ。」

「何しみじみしてんの。まだ修了式でもないのに。」

と、依澄が笑って肩をポンッと叩いてくる。

「うそ、声に出てた?」

「あっはっは。ダダ漏れだったよ。」

ヒーヒーと笑う荻野。

【私は、私のままが好きだ】

誰かに変えて欲しかったはずの日常は、いともたやすく半回転した。

まだ肌寒い三月。澄んだ早春の空。

今までの、どの時よりも、四月が待ち遠しくてたまらない。

（指導教諭／大　浦　美　紀）

《作品の意図》

劇的な、ドラマや映画のようなことがなくとも、日々の自分のすぐそばにあることに気付きさえすれば、自分を、日常を変えることができると伝えたいと思い、この作品を書いた。

また、人と人、特に身近な人との繋がりが希薄になってしまう今、事情を知らずに事実やイメージだけで誰かを決めつけてしまうことの悲しさも伝えられるよう組み込んだ。

読む人によっては、「たったそれだけの普通のことだろう。」と思うかもしれない。だが、読んだ誰かが、自分の日常の「たったそれだけの普通のこと」に目を向けてくれることを願っている。

《作品の寸評》

学校生活は情報戦だと考える主人公芽生が、一つの出来事を通して、情報ばかりを気にして人を先入観で決め付けてしまうことの怖さに気付かされるという物語である。

人と人とのつながりのおぼつかなさに悩む主人公が、ありふれた日常の中での些細な出来事で傷つき、「私の中の私が、『もっとちゃんと私を見て。』と言っていた」と、初めて自分の内面に目を向ける。そして、表面的なつきあいだと思っていた友人たちと心を通わせ合うことで、「誰かに変えて欲しかったはずの日常は、いともたやすく半回転した」と、先への希望を抱くまでの心情の変化が確かな筆力で描かれている。

「他人の都合や思惑に振り回されず自分と向き合い、自分自身に正直であれ」という作者のメッセージが伝わり、心揺れ動く中学生の共感を呼ぶ読後感さわやかな作品である。

構成も工夫され、芽生の心の呟きを見出しとして展開する場面の間に、友人の芙文と依澄それぞれの視点からの叙述を挿入することで、登場人物相互の人間関係を明瞭に浮かび上がらせた。

また、冒頭の「鈍色の空の下」と結末の「澄んだ早春の空」の際立った対比により、主人公の内面の成長が巧みに表現されている。

（審査員／伊　藤　幸　夫）